

本書は南部藩家臣団の系譜総覧といえる「参考諸家系圖」（以下、「系圖」と略記）全八十六巻を五巻に翻刻したものである。この「系圖」は盛岡藩土星川正甫が藩主の内命を受け、藩士の系譜に藩主南部氏一門の系譜を加えて編纂したもので、収録されている家系は南部氏一門二百八十二系、家臣二千四百九十一系に及んでいる。前者は公族之部として十巻、後者は異姓之部として七十六巻にまとめられている。星川正甫はこの「系圖」を文久元年（一八六一）九月盛岡藩十四代藩主南部利剛に献上した。正甫について少し紹介すると、明治維新後は岩手県の役人として地理課に勤務し、明治十三年（一八八〇）に死亡している。「系圖」のほか「公国史」「盛岡砂子」等の著書がある。

「系圖」は現在三種残っており、岩手県立図書館に一種、盛岡市中央公民館に二種架蔵されている。このうち盛岡藩の藩政資料を多数所蔵している公民館にある「浄書」本と呼ばれるものが恐らく献上本と思われるが、今回の翻刻に際しては、公民館にある朱筆のはいった「下書」本と呼ばれるものを忠実に筆写し、その後さらに丁寧な考証のあとがうかがえる図書館本を底本にしたという。筆者の個人的希望を述べるなら、公民館本との異動の様子がわかるように翻刻してもらえたらさらによかつ

たと思う。

江戸時代には藩によってこのような系図類の編纂は行われたが（たとえば「仙台藩家臣録」）、何といっても幕府の行った「寛永諸家系図伝」（以下「系図伝」と略記）全三百七十二巻と、これを約一七〇年後に修正増補した「寛政重修諸家譜」（以下「重修譜」と略記）全千五百三十巻が著名である。共に現在翻刻されて（「系図伝」は翻刻中であるが）我々研究者は活字化されたものを見ることが出来るし、史料として利用している。これらは、大名や旗本、御家人から呈出させた家譜を編纂したものである。

一方、「系圖」の「目録」にある凡例によれば、「系圖」の基本的史料となったものは下記の七部の系図類であった。「系胤譜考」六十二巻・「諸士系譜」十巻・「普士系鑑」十四巻・「御家中由緒」三十巻・「諸家系圖」十巻・「奥南世臣系譜」三十二巻・「諸士譜」二巻。このうち「系胤譜考」（寛保年間八一七四一～四四〇に盛岡藩士伊藤祐清がまとめた系譜）を一番参考に行っているようである。「系圖」は藩士の家譜を呈出させて編纂したものでないだけに、系図の正確度には今一つ信頼性がおけない点もあるが、「系図伝」と「重修譜」の關係に、「系胤譜考」と「系圖」の關係をなぞらえることが出来る。星川正甫が「系図」を編纂しようとしたねらいは、「系胤譜考」以来百二十年近くたった時点で、各家の系図の整備と各家の由緒の正しさを今一度期すことにあったと思われる。

それでは、「系圖」にはどのような家々が書かれているか見てみよう。

(1) 文久元年現在まで存続している家の系図が書かれているのが普通だが、

記事は文久元年まで連綿と書き継がれているわけではない。天保年間もしくはそれ以前で記事が終わっている。この点は他のいわゆる系図類と大きく違う点といえよう。但し文久元年時点の家禄と当主は書かれている。(2)断絶した家の系図が書かれている。(3)途中まで系図のわかる家の系図が「後不詳」として書かれている。(4)禄を収公された家が書かれている。(5)当主が他家を継いだため後継者のいなくなった家が書かれている。(6)他領へ移住したため南部藩とは縁のなくなった家が書かれている。

(7)寛文四年(一六六四)に成立した八戸藩の家中となった家の系図が書かれている。(8)新規に召し出された家の系図が書かれている。(9)八戸藩において浪人となった家が書かれている。(10)由緒のない家の系図が書かれている。というようにおよそ十種の特徴をもって各家の系図が書かれているのである。このうち(2)と(6)は「系図伝」「重修譜」では余り見られない記述といえよう。また(7)と(9)は盛岡藩とはいわば関係のない記述である。公族之部においても八戸藩々主家の記述はみられており、「系図」がいわゆる南部藩にかかわる系譜総覧といわれる所以である。

さて本書は史料としてどのように利用出来るのだろうか。「系圖」を利用した南部藩家臣団の研究については、編集委員の一人である加藤章氏が各巻末に解題を書いておられる。「近世における系図と南部藩家臣団の成立」「南部藩家臣団の経済的基盤」「南部重直の家臣団政策」「南部藩家臣団の知行地と新田開発」「南部藩家臣団における「家」の存続と動揺」。この解題は今後の南部藩家臣団研究の一つの指針を示したものと評価出来よう。これからの研究の発展が望まれる。

ところで、筆者をはじめ南部藩の隣藩である津軽藩を研究している者

にとってもこの「系圖」は研究史料として利用出来る。系図をそのまま信用するというやり方ではなく、方向付けに活用出来そうだ。管見の限りで具体的な例を示してみよう。まず最初にとりあげたいのは津軽藩の藩祖為信の出自についてである。津軽氏の祖については種々言われているが、『弘前市史 藩政編』(昭和三十八年刊)ですでに指摘している通り、為信は南部氏の一族の出であったと考えられる。国立史料館蔵津軽家文書の中にある。三通の南部右京亮宛の文書、伊達家文書の中にみえる片倉小十郎宛の河島市佑重続書状の記述等もそれを裏付けている。

「系圖」では公族之八、七戸氏の項(第一卷二四一―四頁)に為信の名前が出て来る。いわゆる久慈系図と呼ばれているもので、それによれば南部氏の祖先行の六男朝清(七戸氏の祖)の子孫である久慈氏の当主治義の二男が為信である。「実母の為に兄と不和にして兄家督の後久慈村を出奔して津軽に至り、大浦氏の養となる、天正十八年津軽を押領す、今の津軽越中守の祖也」という記事が書かれており、兄との不和から津軽へ来たことになっている。兄とは治義の長男信義で、「家督生来身幹五尺過すといへとも文武の達人と称し、安信公の時先鋒となりて三閉伊逆徒を征して功あり、依て諱字を玉ふ、死年三十」と書かれている。安信公とは南部二十三代安信のこと、永正五年(一五〇八)四月五日に死亡している(第一巻七頁)。三閉伊逆徒云々とは何時のことか不明なので、信義の死亡時を安信の没後十年と仮定してみると永正十五年(一五一八)になる。しかし為信の生年天文十九年(一五五〇)とは大きな開きがある。為信の没年慶長十二年(一六〇七)は今のところ間違いはないので、為信の生年を早めても信義と為信の關係に疑問が出て来る。

「系圖」には自己矛盾があることがわかる。南部氏の一族であることに間違いはないが、為信をこの系図に入れているのは何故か。今後の研究課題であろう。因みに安信の没年については「重修譜」も同年月日としており、三戸郡南部町には安信の墓といわれる宝篋印塔も現存している事を付け加えておく。なお「系圖」では、信義の家系は正保・慶安年中（一六四四～五二）に生存していた寿光禅尼の代で一応絶えている。ただこの尼の記事には「生来謚字を好み常に久慈氏祖先の系図を説（中略）久慈氏の系図専ら此に出ると云」とあり、為信の久慈氏出自説は江戸時代前期に形成された可能性を示している。

一方、異姓之五十七にも久慈氏の家系がみえている（第四卷四六一～二頁）。久慈隠岐を祖に持つ、文久元年現在五十石の久慈伝兵衛家である。久慈隠岐についての記述が津軽側では全く見る事の出来ないものである。「生国津軽ニテ、津軽越中守信牧三男也、兄津軽土佐守信義家督ノ後睦カラス、終叛テ浪人トナリ、御國へ来リテ死」とある。津軽家の系譜によれば、信牧の三男は津軽百助信隆であり、彼は三代藩主信義代から四代藩主信政代の初期にかけて家老を勤めており、万治元年（一六五八）に死亡している。津軽藩主家の系図に出て来ない人物が存在するということになるし、為信の津軽出奔と全く逆のケースと言えよう。兄が信義という同名なのも共通性がある。

さて、本来津軽地方に領地をもつていながら天正十八年（一五九〇）の津軽為信の近世大名としての独立を契機に、領地を捨てて南部領へ立ち返った武士達の動きが「系圖」からわかる。公族之三にみえる浅石（浅瀬石）氏（第一卷六三～五頁）、同九にみえる大光寺氏（本来は堤

氏）（同卷三〇九～一二頁）、異姓之七にみえる乳井氏（第二卷一～二頁）、同二十四にみえる波岡氏（本名は北畠氏）（同卷五五三～五頁）、同二十六にみえる高田氏（第三卷三三～五頁）・奥寺氏（同卷四〇～三頁）・今渕氏（同卷四八～九頁）・高杉氏（同卷五二～三頁）・蒔内〔苗〕氏（同卷五六～七頁）、異姓之四十二にみえる川井氏（同卷五四～五頁）、異姓之六十八にみえる平舘氏（第五卷二〇五頁）である。これらの各氏は浅瀬石村、堤ヶ浦・大光寺城、乳井村、浪岡城、高田村（高田城）・荒川村、奥寺村、今渕〔別〕村、高杉村、蒔苗村、川井村、平舘村を領地としていたり居城としていたり、その村名をとって氏名としている。また、これらの村名は現在も大字等で残っており、地名研究の上でも「系圖」をある程度利用出来ることがわかる。波岡氏は南朝の重臣北畠顯家の子孫と記事が書かれている。高杉氏は姓が源と藤原の両説があるのだが、「先祖某ヨリ代々津軽高杉村ニ居シテ氏トス」とあるので、現在弘前市中別所に残る板碑や同市長勝寺の梵鐘に姓名が刻まれている源光氏（高杉の郷主と思われる人物）の子孫にあたるのではないかと推定される。

これに対して、異姓之三十七にみえる大湯氏（第三卷四〇六頁）、同四十一にみえる乳井氏（同卷五三〇～二頁）は「系圖」からどういう契機で津軽家へ仕えるようになったかがわかる。大湯氏は天正十九年（一五九一）に滅んだ九戸政実の一味で鹿角郡に領地をもっていた大湯氏の子孫であり、次郎右衛門が一担二十七代南部利直に仕えたあと、子の彦三郎と弟の彦右衛門と共に津軽へ出奔している。彦右衛門と彦三郎は津軽土佐守に仕えており、これは三代信義のことと思われる。彦右衛門は

二百石を領しており、大湯氏の子孫には後に、役方の職では家老に次ぐ重職である用人に就任するものも出て来るのである。乳井氏の場合は前述した乳井氏とは同族と思われるが、「津輕乳井村ノ住人也」とあって微妙な差がみられる。乳井大隅が天正十八年の津輕為信の独立に際して投降し、「其馬廻ヲ勤テ三千石ヲ領ス」とみえる。『津輕旧記伝類』にみえる乳井大隅建清と同一人物と思われる、南部側・津輕側の史料で動向が一致する人物といえよう。

このほか、前述した波岡氏の他にも南朝の重臣北畠氏の子孫が盛岡藩士となっていることが散見する。田丸氏（第四卷二九四～六頁）と星合氏（第五卷八五～七頁）である。共に「本國伊勢ノ人」とあり、北畠の庶流である旨の記事がある。伊勢国司となった北畠顯能系であるので、波岡氏とは系譜が違うが、南部氏が南朝方として活躍したことから北畠氏の子孫の藩士の召抱えは無関係ではないと思う。田丸・星合両氏の召抱えは江戸時代前期のことであり、南部家では北畠氏の末孫の動向にそれとなく注意を向けていたのではなからうか。南朝方としての南部氏の働きを高めるねらいがあったのではという憶測も出来る。

以上、「系圖」について書評というよりは、研究史料としてどのような利用の仕方が出来るかという点を述べてきた。最後に希望を述べると、別巻として索引の刊行が予定されているようであるが、一刻も早い発行を希望するものである。

（前沢隆重・加藤章・樋口政則・山本實編、国書刊行会、各九八〇〇円
A5判、昭和五九年十二月五日～六〇年九月三〇日発行、五巻）

（青森県立郷土館研究員）